演題名：地域密着型特養のあるべき姿をめざして

事業所所在地：愛知県江南市
法人名：社会福祉法人　たんぽぽ福祉会
事業所名：地域密着型特別養護老人ホーム　たんぽぽ鶴の里
職種：管理栄養士
発表者名：楳村綾香　山根那津実

【私たちがめざすべき地域密着型】

　地域密着型サービスの目的は、重度な要介護状態となっても住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最後まで続けることができるとされています。
住み慣れた地域での生活の継続を「社会との共生」と捉え、入居者様ご自身が出来る事に参加して頂きながら、社会との繋がりや人との繋がり、必要とされる喜びによる充足感を得られるという事を目標にしました。

　当施設は、開設 2 年目を迎えた江南市の地域密着型特別養護老人ホームです。特別養護老人ホーム 29 床、ショートステイ 10 床という小さな施設でありながら、管理栄養士 2 名という配置で運営しています。100 床に 1 人居れば良い管理栄養士が 2 人居るという事をマイナスに捉えるのではなく、2 人いるからこそ栄養士もチームケアの一員として存在感を十分発揮できるよう努めています。

　「食」の専門である管理栄養士ですが、鶴の里では、ただ栄養管理された食事を提供するだけではなく、「体が健康」「心も楽しい」をコンセプトに加えて、入居者様の生活の質の向上へ協力できる事を管理栄養士の立場から追求しました。

【地域と繋がる】

　鶴の里の一番の特徴として挙げられるのは、地域密着型であるというところです。江南市に長く縁のある方が入居されているならば、食に携わる職種として、馴染みのある地元の食べ物を提供できないかという考えに至りました。

①近くのお店へおかずを買いに行く感覚を思い出して欲しい。
・古くから地元で愛されるコロッケ屋へ行き、入居者様にコロッケを買って頂き、昼食の 1 品にする。
・計 4 回の開催で、各ユニット 3 名ずつ外出した。
・入居者様の昔の話を聞くきっかけとなり、いつもとは違う表情を見せて頂けた。
②誰もが参加できるイベントをしたいという気持ちから生まれた企画
・前回のコロッケ外出に行けなかった入居者がみえたので、施設の玄関まで地元の豆腐屋のトラックを寄せて貰い、施設にいながらも買い物を楽しんで頂けるように企画した。
・昔ながらの豆腐屋らしいの笛のメロディを懐かしんで頂けた。

・入居者様に買い物をして頂き、豆腐は翌日の汁の具にして、全員に召し上がって頂いた。

③毎日食べるお米だからこそ!!

・地元の物を口にして欲しいという想いから、江南市で育った愛知県の品種「あいちのかおり」の提供を開始した。

米農家の長谷川様の田んぼへ稲刈りの様子を見学させて頂き、新米を見ながら作り手の話を聞く事が出来た。

・通常提供のあいちのかおりとは別に、月に1度、高級米(いのちの壱・ゆめぴりか・こしひかり等)を提供するという企画性を重視した米の提供も同時に開始した。イベント名は「贅沢米」と名前を付けた。米業者の協力もあり、入居者様から追加料金はなしで提供する事ができた。

【管理栄養士が関われる健康管理とは、オリジナルVTR作成に至るまで】

・誤嚥性肺炎が原因で入院する回数が多いことから、嚥下体操の重要性を再確認した。

・多くの入居者様に嚥下体操をして欲しいが、栄養士だけの力では難しく、介護職にやって貰うだけでは、業務負担となってしまう。

・ネットの動画サイトにある物は、著作権が心配で使用の判断が難しい。

(実施方法)

・各ユニットのテレビにオリジナル嚥下体操が入ったUSBを繋げ、リモコン操作のみで観られるようにした。

・内容は、基本的なパタカラから始まり、季節を感じる曲や水戸黄門等の聞き覚えのある曲にパタカラで歌詞をつけ、職員の声で歌を録音し、3分という実施しやすい動画にした。

・2か月毎に作成しており、最初は栄養士のみの出演だったが、各部署の協力により、施設長を含む多職種も参加する動画となった。

・毎日嚥下体操が出来るようになった。

・先導者はVTRなので、現場スタッフは動画に合わせて、入居者のフォローをするだけとな

った。
・毎日観ているので、入居者様から他部署の顔や声を覚えて頂けるようになり、他部署と入居者様との会話が増え、人との繋がりが広がった。
・2か月が終わる頃には、パタカラの合唱が聞こえてくるようになった。

【心が楽しい食】
　多くの施設で行われている手作りおやつも鶴の里の栄養士がやると本格的な〇〇〇〇付きで、より刺激があるイベントになります。〇〇〇〇とは、コスプレです。
・メイドのコスプレをして、ホワイトデーにケーキを給仕。また、夏に実施したアイスクリーム屋さんでは、アイスクリーム屋さん風の服に着替え、髪の毛もツインテ―ルや帽子をかぶり、普段の栄養士とは全く違う格好でユニットへ行った。
・普段会わない人が来て、笑う入居者様、感激して泣く入居者様、照れる入居者様など、普段見られない表情が見られた。

　また、地域にある修文大学管理栄養学科の学生が鶴の里の夏まつりを一緒に盛り上げてくれました。
・若い学生の笑顔や一生懸命に動く学生の姿を、やさしい目でみる入居者様や笑顔で話しかける入居者様の姿が見られた。
・学生も戸惑いながらも、入居者様との関りを持とうとしてくれた。

【まとめ】
今回の取り組みを進める事で、入居者様を取り巻く地域との繋がりや職員間のコミュニケーションの大切さを感じました。企画する事で声掛けが自然と増え、地域や職員間の結び付きが強まりました。また、企画を実施すると、入居者様だけでなく、現場の介護職からも喜びの声が聞くことでき、次の起案へのやる気が全体に生まれています。このサイクルを少しずつではありますが、大きくしながら鶴の里の一員(ONE TEAM)として、成長していきたいと思います。